

岡屋昭雄著

## 『心にひびきあう国語教育の創造』

本書は、次のように構成されている。

- I 国語教室の授業の営み
- II 国語科教育の課題と実践
- III 国語教育実践史
- IV 作品研究事例

そして、筆者はそれぞれについてその執筆意図を次のように述べる。

Iでは、国語教室が、教師と子供の信頼と愛情とに溢れた場所、つまり人生のドラマを創造する劇場となつてほしい、と願うものである。

IIは、国語科教育の課題に即して論

じたものである。したがって、「人間の」ということにこだわって論究したものである。

IIIでは、教師の自己陶冶はどのようになされるかという視点を通底させたつもりである。

IVは、宮沢賢治の作品は、現代の人間の生き方を活性化するものだ、と信じて書いたものである。

本書は、多少無理な言い方をすれば、「願ひ」「こたわり」「通底し」「信じ」書かれたものであると言うことができ

る。すなわち、筆者の、長年広島大学附属学校における実践によって培われた、国語科学習指導の局面局面を支え続けたであろう、情熱に貫かれているということである。そういう観点でみれば、本書の最重要の力点は、構成のI国語教室の授業の営み／II国語科教育の課題と実践にある、と言うことができる。

印象に残った点を、構成に沿って摘書してみると次のようになる。

### I 国語教室の授業の営み

この章は、結果として、この「教育実践力」の探求という命題を軸として展開している、という言い方ができるであろう。筆者は、今日、附属学校から、教員養成大学が突きつけられる課題を示し、大学が行うべき、教育内容について、今日のかつ重要な提言を行っている。

すなわち、附属学校の要望は、端的に言って、「指導案が書けるようになってほしい」ということである。実際の学習者を持たない大学の授業の場では、指導案の指導は、その理論的背景、ないし、教材解

釈を中心とせざるを得ない。しかし、学習者研究に支えられた教材研究は教育実習中に附属学校の指導のもとで行うという形だけでなく、「大学での教科教育の時間は、理論的な背景を持った実践技術体系の講義をすることが大切となる」（本書一〇ページ）と云うのである。今日の教員養成系大学の抱える、切実な問題を鋭く切り取った立言である。

## Ⅱ 国語科教育の課題と実践

この章で、目についたのは、「対話」ということである。ここでの筆者の立言を追っていくと、「対話」が、実は、教育という教えることの行為体系の中の、ベース的なものを形作っているということが主張されているように思える。それは、Iの中でも、「二 学級づくり」等で述べられていることである。

これらの立論は、時として、情熱の発露をともなう熱を帯びたものになっているように感じる。それは、まさに、「心に響き合う」国語教室を真剣に希求する、筆者の、面目躍如の感がある。

(A5判、四三二ページ、昭和六十三年、溪水社刊、三、〇〇〇円)

(住田 勝)